

海という名の本屋が消えた (69)

平野義昌

山本周五郎5ヵ月の神戸(2)

山本周五郎は時代小説作家と思われがちだが、その作品は幅広い。史実を題材にした歴史小説、掟に悩む下級武士や市井で慎ましく生きる人々を描く人情小説、少年少女小説、推理小説、戯曲もある。数多くの作品が映画化・ドラマ化されている。昭和世代なら映画「赤ひげ」や大河ドラマ「樫ノ木は残った」を思い起こすだろう。悲劇でも滑稽ものでも、作品の底には真摯に生きる人々への愛、励ましがある。その意味ではデビュー作「須磨寺附近」は青年の叶わぬ恋を描いて、一見異色の作品と言える。しかし、「生きている目的」を探究する周五郎の基本姿勢がある。

清水清三の幼なじみ・青木が須磨の兄(アメリカ勤務)の家で兄嫁・康子と暮らしている。そこに清三が厄介になる。彼は「精神的にかなり手強い打撃を受けていた」。どのような打撃か不明、関東大震災にも言及していない。青木から康子のことを聞かされていたし、写真も見ている。青木の「君なら一眼で恋着するだろうなあ」という言葉通り、恋が「清三の心の中でいつのまにか育っていた」。〈「遠慮なぞしないで、ゆっくり遊んで行ってくださいね、二人きりで寂しいんですから」／飯が終ると康子は女にしては鋭い瞳を動かしながら云った、清三はその瞳に威圧されるような気がした。康子は林檎をむいてくれた、清三は白い長い指が巧みに動くのと、果実の肌と刃物の触れ合う微妙な音を聞きながら、温かい幸福な気持ちにひたっていた。〉^{註1}

清三は大阪にいる先輩に仕事を頼み、Kという雑誌の仕事を世話してもらう。補註1

康子は清三を優しく送り出し、迎えてくれる。清三は「自分に注がれる鋭い情熱的な冷たい瞳をわくわくしながら味わっていた」。

雨の日の夕暮れ、康子が散歩に誘う。〈清三は大きな池のある広場へ連れて来られた。ここが須磨寺だと康子が云った。池の水には白鳥が群れを作って遊んでいた、雨がその上に静かに濺いでいた。〉^{註1}

二人は源平合戦を伝える史跡や高札を見ながら寺の奥へ進む。静寂の中、康子が問う。〈「あなた、生きている目的が分りますか」／「目的ですか」／「生活の目的ではなく、生きている目的よ」／清三にはちょっと康子の云う意味が分らなかった。康子は清三の返辞を待つ容子もなく、さつと傘を開いて雨の中に歩み出た。(後略)」^{註1}

3人で六甲登山、清三が康子の草履の花緒をすげ替えてやる。康子の瞳に頬が熱くなる。〈時間がたつに連れて、清三の胸の中では、康子の働きかけてくる情的な瞳が領域を拡めていった。それが清三にとってはひびょうに幸福だった、で清三はことさらにその中へ溺れていこうとした、ときおり理性がその気持を引戻そうとするが、結局引戻すことはできなかった。〉^{註1}

青木が清三に、康子の性質がよくわからない、と言う。3人で食事中、結婚の話になる。康子が青木に、自分たち夫婦の結婚が幸福かそうでないかわかるか、と問うた。

清三が体調不良で寝込んだ時、夫からの電報が会社に届き、康子は出かけて行った。清三は「騙

中が悩まし」くなり、康子のことを「ますます恋しく」思う。枕を噛む。涙が流れる。眠っている清三の顔に康子の顔が近づいていた。手を握りあったまま、康子は目を閉じ、清三は枕に顔を押し伏せていた。〈「我慢なさい」／程経て康子がそう呟いた、そして清三の手を蒲団のしたに入れて、立って階下へ去った。(後略)」^{註1}

康子は清三に他家に下宿するよう言い渡す。自分はアメリカに行く、と。康子はまたも「我慢なさい」と言って、去っていった。

周五郎は「豹」(註2)でも兄嫁と義弟の恋愛感情を描いている。この女性にはさらに謎である。実際に起きた動物園の豹脱走事件の不安を背景にしている。(補註2)兄はアメリカで女性問題から自殺した。一周忌の後、義弟が二度目の須磨訪問時のこと。夜中、豹に怯えた兄嫁が義弟の部屋に忍んで来る。義弟は眠れない夜を過ごす。しかし、その日中に豹は射殺されていた。義弟は深夜帰ってきたので顛末を知らなかった。

周五郎は他の作品でも年上の女性との恋愛を描いている。晩年の時代小説「へちまの木」(註3)(瓦版屋で働く房二郎が少しずつ世間を知り、年上女性と初体験)について研究者が解説する。〈……房二郎の得た人生観は、自分自身を含めて、人間はみな迷子ではないか、という頼りなくもの悲しいような、憂鬱の実感であった。須磨時代、二十歳だった青年の心象風景が、みごとに六十二歳の老練作者の筆で、確実に截り取られている。〉^{註4}
「須磨寺夫人」モデル女性は親友・桃井達雄の姉と知られていたが、消息不明だった。1975(昭和50)年12月、神戸新聞記者・宮崎修二郎が「須磨寺附近」について記事を書いたところ、読者から情報もたらされた。翌76年初め、宮崎は宝塚在住の夫人と長男氏を訪問した。2月記事掲載、実名も明らかにした。周五郎研究の大ニュースである。作家・足立巻一の勧めがあり、改めて雑誌「歴史と人物」(同年6月号、中央公論社)に発表した。以下インタビューから。

1924(大正13)年1月半ば、「須磨寺夫人」と長男は渡米、三十六はその1週間ほど前に「夜の神戸社」を退社、三十六も夫人母子と名古屋まで同じ汽車、夫人は別れ際に銭別20円渡した、など。〈「姉さん、もし山本周五郎という名の小説を見たら、私が出世したと思って下さい」と言われました。家にいるときも、二階にこもって原稿用紙をクズでいっぱいにして…。だからあのころから山本周五郎のペンネームだったんですね。〉^{註5}

夫人の話では、三十六は下宿代をきちんと納め、仕事以外は図書館通い、達雄にわがままを言い、酒好き、人をそらさない人間の魅力があった。長男の思い出は、〈団子鼻で奥目のぶおとこでしたが、やさしい心の持ち主で、私が『少年世界』なんか読んでると、ムキになって母を叱るんです。「こんな俗悪なものはダメですよ」って。そして鈴木三重吉の『赤い鳥』を買って来られて…。〉^{註5}

夫人は緋の着物を仕立ててあげた。周五郎が生涯緋で通した理由の一つかもしれない。

夫人が「須磨寺附近」を知ったのはずっと後のこと。20歳になる孫が周五郎の「文学アルバム」を購

入、おばあちゃんのことが出ている、と言うので気づいた。

〈小説って、本当のことを書くんじゃないだし、あれ、事実じゃありませんよ。私も、周五郎さんが嫌いじゃなかった。あの人も私が好きだったんでしょうが…。ま、読む方がどうお思いになろうと、かまいませんよ。(後略)」^{註5}

夫人は、大震災後すぐに三十六と達雄が須磨に来た、と語るなど記憶に誤りもある。もちろん周五郎にも記憶違いはある。

同年秋に「須磨寺夫人」一家はアメリカから帰国した。三十六はその年末と翌年末に弟を伴い須磨を訪問している。

周五郎は彼女のことを「少年時代の憧れの的」だったと告白している。(註6)叶わなかった恋を一生背負い続けたが、他の女性に目を向けなかったわけではない。それなりの女性体験がある。二番目の妻(最初の妻は病死)が、周五郎は親しくつきあった女性のことを隠さず話をした、と証言している。註7

1931(昭和6)年、桃井達雄は伝染病にかかり、神戸で亡くなった。周五郎は「須磨寺夫人」にお悔みの手紙を書いた。

註1 山本周五郎「須磨寺附近」(『花枕記』新潮文庫、1981年)所収。

註2 山本周五郎「豹」(『人情真長屋』新潮文庫、1980年)所収。初出は『アサヒグラフ』1933年9月20日号。

註3 山本周五郎「へちまの木」(『ちいさこべ改版』新潮文庫、2006年)。初出は『小説新潮』1966年3月号。

註4 木村久通典「山本周五郎の須磨」小峰書店、1975年

註5 宮崎修二郎「須磨寺夫人」聞き書き。(『須磨寺と山本周五郎』大本山須磨寺塔頭正覚院、1994年)。初出『歴史と人物』(中央公論社)1976年6月号(「山本周五郎の“永遠の女性”——文豪の青春に大きな影響を与えた“須磨寺夫人”」)。

註6 「作家の素顔」(河盛好藏との対談)(山本周五郎「小説の効用・青べか日記」新潮文庫、1985年)所収。

註7 清水さん「夫山本周五郎」福武文庫、1988年

補註1 足立巻一は、「プラトン社が出版していた直木三十五編集の『苦楽』のようにも思われ(木村前掲書より)」と書いている。同社は化粧品会社・中山太陽堂の出版事業。1922(大正11)年雑誌「女性」、24(大正13)年「苦楽」創刊。編集顧問・小山内薫のもと関東大震災後は直木、川口松太郎が加わった。三十六かどの程度関係したか不明。「須磨寺夫人」は大阪で仕事はしていないと証言する。

補註2 1910(明治43)年兵庫電気軌道(現在の山陽電気鉄道)が兵庫・須磨間に開通。運賃増収のため須磨寺と連携し遊園地を造成。池にボートを浮かべ、人形館、動物園開園。桜の名所で四季折々の花も楽しめ、周囲には飲食店・旅館が建ち並んだ。昭和に入ると神戸市電の延長やバス路線進出で電車旅客は減少。さらに金融恐慌による不況で遊園地経営は悪化。31(昭和6)年秋、催し物経営を一切中止した。豹脱走事件は大正6年6月のこと。豹は脱走から10日余り後、神戸北部の山中で射殺された。『須磨の近代史』(神戸市須磨区役所、2013年第3版)、『山陽電気鉄道百年史』(同社、2007年)参照。



出来事ファイル (No.19－8)

■和田興産(株)代表・和田憲昌さん
旭日双光章受賞

栄町通3丁目に拠点を置き、市内中心に「ワコーレ」ブランドで、手広くマンション開発に取り組んできた和田興産(株)は、弊協議会内でまちづくりに取り組むリーダー企業のひとつ。同社会長の和田憲昌さんは阪神淡路大震災時、住宅供給で復興を支えたほか、売買取引の透明化など不動産業界発展の功労者として令和元年5月、旭日双光章を受賞された。おめでとうございます。(和田興産(株)ホームページより)



■元町もタワーマンション規制地域に

便利な街中の暮らしを求める傾向があるなか、神戸市はこうした動きに歯止めをかけるため、このほど三宮中心部における住宅建設を禁止した上、その周辺の新神戸や元町、JR神戸駅周辺でも高層のタワーマンション建設を規制する方針を固めた。都心部の住宅地化に歯止めをかけるためで、関連の条例改正案を6月市議会に提出、来年7月の施行を目指す。(神戸新聞・6月11日)



■神戸東地区クリーン作戦

第一水曜日の7月3日、神戸駅東地域クリーン作戦を実施した。参加したのは奈良山会長以下エスタシオン・デ・神戸、ネットヨタ兵庫(株)従業員のみなさんのほか、元町通7丁目自治会からも地元地域を対象に3名が参加、地域の通りをくまなく散策、クリーン作戦を実施した。



■平成30年度総会終わる

みなと元町タウン協議会は6月7日(金)午後2時30分から、エスタシオン・デ・神戸で平成30年度の総会を開催した。奈良山会長によるあいさつにつづき、平成30年度に実施した事業報告、収支報告、監査報告を経て平成31年度の事業計画案、収支予算案を提出、参加者の賛同を経て、総会を終了した。当年度内の協議は、元町商店街の改装案件が中心で、新築物件は事務所・ホテル複合ビル1件の状況に終わっている。



■奨励賞を受賞した神戸タータン

神戸の街をイメージした神戸タータン柄の商品が幅を広げている。ファッション分野からスタートした神戸タータンだが、今では服やネクタイはもちろん文房具や食品、サントリーや山崎製パン、森永製菓が包装に採用するなど裾野を広げている。その神戸タータンの取り組みが、地域経済の活性化に寄与したとして、日本マーケティング協会から年に一度、優れたマーケティング事例を選出する日本マーケティング大賞奨励賞を受賞した。



□読者プレゼント(Ⅰ)

特別企画展「へんがおの世界」
「変顔」とは、見た人を笑わせるような、おかしい表情をつくること。現代の私たちが見るとどこかおかしい、笑ってしまう表情をしているヒト・妖怪・キャラクターを取り上げ、「顔」の表現の歴史を通して、表情豊かな日本美術の一面を紹介する楽しい展覧会です。
鑑賞ご希望の方は、住所、氏名、年齢、本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。

期間：7月13日(土)～9月1日(日)
会場：兵庫県立歴史博物館(079-288-9011)



■懇親会、なごやかに

平成30年度の総会終了後、午後6時からエスタシオン・デ・神戸で開いた懇親会には協議会の団体会員や企業会員を中心に、協議会の運営上、関係の深い兵庫県をはじめ神戸市から各部局のほか生田警察、さらには報道関係代表者など50名が参加、関係者からの興味深い話題の提供も得ながら懇親会をすすめて、神戸市をはじめ報道関係者からのこぼれ話にも耳を傾けて懇親会を終わった。



□9周年を迎える元町映画館

元町映画館は8月21日、開業9周年を迎える。同館では「周年企画」と題して独自の特集作品を上映しているが、今年は10月に山形で開催予定の「山形国際ドキュメンタリー映画祭」が30周年を迎えるのを記念して、この映画祭で公開される優れた作品のほか、9年ぶりに当館のオープニングをかざった「要塞」のほか、「スクリーンプレイ：時代」など5作品を上映します。詳しくは、元町映画館(078-366-2636)まで。



□読者プレゼント(Ⅱ)

夏期特別展「恐竜ワールド」
生物の歴史は、進化と絶滅の繰り返しです。それは、まさに生物たちの「大冒険」と呼ぶにふさわしい進化の旅といえます。今回の展覧会では、生命の誕生から恐竜の時代まで生物の進化をたどり、多くの研究によって判明した古代の生き物たちの姿を、化石や標本等の資料を中心に紹介します。
鑑賞ご希望の方は、住所、氏名、年齢、本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。

期間：7月13日(土)～9月1日(日)
会場：明石市立文化博物館(078-918-5400)

